

今そこにある危機

—原発を飼いならす?—

中 村 博 一

nu-Clear and Present Danger

—Taming the Genpatsu (nuclear power station)?—

Hirokazu Nakamura

文教大学生生活科学研究所では毎年公開講座を実施している。今年度のテーマは「環境問題を考える」で、わたしも「環境と文化：放射線と危険な力」というタイトルで参加させていただいた。本稿はその際の草稿をもとにしている。

テーマを検討した1年前は、ダイオキシンや環境ホルモンが環境問題の主潮であり、原子力災害への関心はチェルノブイリ後の90年代はじめに比べるといささか低迷気味であった。実はチェルノブイリ後も原子力とわたしたちの関係は知らず知らずのうちに深くなりつつある。核実験が頻発し、わが国の原子力発電が緒についた60年代は、雨が降ると「家の中に入りなさい」といわれたものだが、現在は当時よりももっと身近で日常的に、ひじょうに具体的な形で原子力と関わりざるをえないにもかかわらず、なぜか環境問題の一角もなす原子力災害への関心はいつまでも持続しない、その点を問題化する意図をも込めて準備をした。結論として原子力災害が起こってもひとりひとりが最低限対応できる知識をもつべき時代になったのではないかと述べた。事故を起こさない、汚染させないといった防ぐ（事前の）知識体系ではなく、汚染を前提に生活する知識が求められ、広められるべき時代ではないかと締めくくった。皮肉にも講座終了後数日して日本原電敦賀二号機で大量の一次冷却水が漏れる比較的大きな事故が出来し、2ヶ月後にはわが国の原子力史上最悪となったJCO東海事業所臨界事故が連続して起こることで原子力についての世間の関心は一挙に高まったといえよう。汚染から身を守る方法がメディア上で議論され、報道されたのは記憶に新しい。講座での問題提起と結論は、なんとこれら事故によって実践されつつあるといわざるをえないような事態になってしまった。その後、原子力防災の見直しをはじめ政府関係機関が対応にあたっているのは周知の通りである。

近くて遠い原発

ところで国内にはいくつぐらいの原発が存在しているのかをご存じだろうか。原発は何基何基と数える。原子炉を単位に原発を数える慣行（地名の後に何号機とつく）からきているらしい。著作によって異なるがこの1年では51ないし52基という数字が出ている。全国に50を超える数

の発電用原子炉があるということなのだ。『東京に原発を』の広瀬現象に代表される反原発の動きが高まった88年から比べると最近10年ほどの間にも10基以上が増設されたことになる²⁾。現在東京電力管内では3分の1を超える電力が原子力によって供給されており、また夜間の電力はほぼ原発からきているとあってよいという(日本原子力発電株式会社の説明による)。ということは、毎日のわたしの生活には原発からくる電気が深く組み込まれているわけだし、生活環境について講義をする5限目の教室の明かりはほとんど原発からきているのだ。ところが生まれてはじめて原発なるものを眼にしたのはようやく昨春のことであった³⁾。バスにゆられて数時間、太平洋に面した松原の中に東海第二原子力発電所の原子炉建屋がそびえていた。原子力発電は生活に組み込まれているのに、原子力についてはあまり知られない。怖そうで近寄りがたいのに、しっかり生活の一部になっている。埼玉県のような原発のない内陸地域の住民の多くにとってはいまだにこうした身近で遠い、遠いけれど近い原子力なのではないだろうか。

JCOの臨界事故から1ヶ月して菊の取材のため再び東海村付近を観光バスで通りかかった。観光バスと原子力災害といえば事故のあった原発に近いある町でバスの窓を閉めさせたひどい事例が思い出される。これは議会で語られ、有名な物語になった。わたしの乗り合わせたバスのガイドは放射能の怖さをネタにしてしゃべり続けていた。60代から80代の乗客がほとんどで、放射性降下物の心配はないから大丈夫だとわたしは注意したのだが、乗客の眠気を覚まそうとするかのようにガイドの言葉は次第に過激になっていった。バスの乗員や乗客の生活圏は原発がない中部地方にある。わたしもまた原発のない山国出身で、水力発電用のダムの造り方や導水管の説明を聞きながら育った記憶はある。周囲では70年代後半以後にようやく、原発をめぐる懸念の語りがおこなわれるようになったようだ。それまでは原子力の平和利用＝科学技術の勝利という印象が強い。個人的に73年から78年まで底生生物や魚類の生態から河川の汚濁を評価する調査に携わっており、環境保護や公害にはかなり意識的に関心を抱いていたものの、原発を環境や生態系の問題の一部として理解するようになったのは79年のスリーマイル事故以後と記憶している。しかも当初は災害という文脈での理解であって、頭の中で環境汚染とつなげて翻訳できるようになったのは比較的最近のことだ。今から考えれば情けないことに、軽水炉という名前の理由や沸騰水型、加圧水型の区別も知らなかった。いかがであろうか？ ご存じだろうか？

原子力とわれわれ

石田英一郎は『文化人類学ノート』所収の「文化とは何か」を水素爆弾の脅威ではじめている。「世界はいま、水素爆弾の脅威におびえている。しかし、水素爆弾は人間自身が作り出したものである。人間が自分の知恵で発明したものを、自分の力で制御することがむずかしいというのは、一体どういうわけであろうか(石田1967、17頁)」と問う。水素爆弾は単にモノではなく人間関係から切り離せないのもあって、人間の生活すべてが、相互にからみ合った中に、その一環として水素爆弾が存在しているのだということ、さらに錯綜した関係そのものの動きから水素爆弾は生まれ出たもので、この関係は「人間個人の意志から独立したそれ自体の運動をもつもののように見える(同頁)」と述べている。水素爆弾を生みだす複雑な社会関係・生活関係全体を文化とするこの定義は、緊迫した核の50年代を映し出している。日本国民にはどうしようもなかった東西間の核戦争の脅威という巨大な物語が語られなくなった今日ではかろうじて、わたしたち自身が原子力をどうするかを一応判断できるようになった。先頃ウラン・プルトニウム混合燃料を用いる発電計画がすべて延期されたのもこうした判断のひとつといえるかもしれない。

しかし、原子力をめぐって判断するのにわたしたちはどれほどの知識をもちあわせているといえるのだろうか。原子力の知識をどれだけ学んで育ててきただろうか。平和利用を政府が開始して以来40年、日本国民固有の原子力に対する姿勢が、あるとすればだが、それにはいまなお、ある象徴表現が使われ続けている (cf. 武谷1974)。「核アレルギー」だ。昨年参加した東海原発の見学会では原子力についての教育がアジア・ヨーロッパの各国に比べて著しくバランスを欠いていると若いガイド役は語り、「核アレルギー」ゆえだと強調した。そのときは疑問を感じたのだが、記憶をたどってみると確かに、広島長崎について習ったことはあるし、原発についても事故が不安だとか反対だということはできる。それなのに核分裂が起こる仕組みや死の灰とは何なのかを学んだ覚えはない。みなさんは原子力発電の燃料がなぜウランなのかを説明できるだろうか？ 放射線は人体にどのような影響を与え、悪影響を防ぐにはどのような方法をとったらよいかを知っているだろうか？

ところが一方では原子力や放射線と隣り合わせに、つまり被曝の危険や恐怖の中で毎日生活する人々もいるのである。原子力関連施設で働く人々がその一例であろう。科学的な知識もさることながら、生活者として核に対する生活世界、核と共に働く文化をつくりあげてきた。その人々の生き方は、すでに原子力に深く組み込まれているのに相変わらず遠いわたしたちに知恵を授けてはくれないだろうか。

核燃料再処理施設の民族誌『核半島』

人類学者 Zonabend はフランスのラ・アージュにある核燃料再処理工場でフィールドワークを実施し、『核半島』を書いた。ラ・アージュとはイギリスのセラフィールド (ウインズケール) と並んで日本の原発の使用済み核燃料を再処理してきたことで知られる地名だ。『核半島』の原著は1989年にフランス語で出版されたが、93年に英訳されている (講座で用いたのは英訳である)。日本では原子力資料情報室が早くから注目し、環境社会学者飯島伸子も紹介している (原子力資料情報室1990、飯島1995)。『核半島』は自文化を対象とする民族誌が増えている最近の人類学としても極めて特異な「異」という設定が有効な民族誌ということが出来る。Rosaldo が描いてみせたような自文化パロディの類には決してなっていない (Rosaldo 1989)。「近くて遠く」しかも「目に見えない」、呪術ならぬ「科学的な」恐怖の世界であることが理由になるかもしれない⁴⁾。

Zonabend は再処理工場周辺の住民や労働者の語りを丹念にひろっていく。語りえない、語られない行為=沈黙も含めて。ラ・アージュでは危険な環境を日常として生きながら、そこにあるはずの危険性が相対化されていく。「足場から10回落ちるよりも10人が被曝した方がましだ」、「被曝はエイズほどひどくはないさ」、こうした言表は端的に放射能汚染という危険の相対化を示していよう (Zonabend1993:100)。原発周辺住民が施設に近くなればなるほど、その信頼性を断言するようになると報告されるように、安全への信頼もまた自らの信念になっていく (ibid.:2)。

日本の原発では被曝の可能性がある管理区域への入域には、ポケット線量計などの計測器を携帯する。以前はアラームメーター、フィルム・バッジ、ポケット線量計が三種の神器といわれたらしい。昨年の東海第二原発の見学会では代表2人がそれぞれ計測器をひとつだけ身につけた。全部いっしょになっていると説明された。ラ・アージュの再処理工場でも管理区域入域にはフィルム・バッジといった測定機器を携帯する。そもそも計測器の役割とは何だろうか？ それは携帯する者に被曝量を知らせ、被曝量のコントロールを可能にさせることだろう。ところがラ・アージュではこの役割に変換が起こっている。フィルム・バッジは労働者の被曝を防ぐお守りになって

いる (ibid.:117)。被曝量を計測して安全を確認するのではなく、バッジの携帯が安全の保証だという信念に逆転しているのだ。

Zonabendによると、労働者はまた被曝に対して2つの民俗分類を適用している (ibid.:107-8)。「照射irradiation」と「汚染contamination」である。わたしの初歩的な知識によると放射線被曝は、身体の外部に放射線を照射されたり、放射性物質（放射能ともいう）が身体に付着したりすることで起こる外部被曝と、呼吸や食事によって放射性物質を体内に取り込む内部被曝に分類される。例えばアルファ線を出すプルトニウムは外部被曝はそれほど問題にならないが（アルファ線は紙を通さない）、呼吸などで肺に取り込んでしまうと長期間にわたって細胞がアルファ線照射を受け続けるから大変危険なのである。しかし、ラ・アークの労働者の被曝の分類はどうやら違うらしい。「照射」は、線源付近を通過したりすることによる被曝で、「汚染」は施設から出るゴミやチリの除去作業などで起こる被曝だという。東海原発でもラ・アークのような分類がありうるのかどうか日本原子力発電の社員に質問をぶつけてみた。するとやはり、外部被曝と内部被曝と解釈されてしまったのだ。Zonabendは、ラ・アークの労働者の被曝の民俗分類「照射」と「汚染」を2系列に分けている (ibid.:108)。「照射：光線：キレイ：強さ：人は強い」系列と「汚染：ゴミ：バッチイ：腐敗：人は腐る」の系列である。同じ被曝であっても、「照射」は肯定的に解釈される被曝であり、「汚染」は徹底してきらわれるのだ。この被曝の分類の背後には光線と汚染pollutionをめぐるキリスト教的な価値観の潜在が示されている (ibid.:107-10)。日本の原発のルポルタージュではこのような分類は報告されていない。

被曝の分類をはじめ、被曝への態度による「カミカゼ」と「金利生活者」の労働者分類も極めて興味深い⁹⁾。科学的言説しかなく見える世界とそこで働く人間の分類の間に恣意性（ずれ）が見られるからだ (cf. Douglas and Wildavsky 1982)。わたしたちはこうした民俗分類の報告から何をえられるだろうか。これを科学的知識の誤解や欠如による迷信ととらえてしまうと、わたしたちの原発も近くて遠いままになってしまうのではなからうか。Zonabendは述べる、「キレイサとキタナサ、強さと腐敗、秩序と無秩序といった観念の間でプレイしながら、工場労働者はまとまりのある一貫した世界 a world of coherence、自分自身の世界を再創造している。核というヤバイ状況に勇敢に立ちむかい、克服する力と能力を示すために労働者は手がかりをえる (ibid.:111)」と。危険な環境に対して主体的なはたらきかけをしているという点において、つまり、危険な環境を彼岸として遠ざけるのではなく、こちら側の自分のコントロール可能な世界と再構築することによって労働者は日々の危険・恐怖の中で生活を可能にしているのだ。

原発ジブシーと旅するジブシーの民族誌

残念なことに日本国内では原子力施設の現場でのフィールドワークは不可能といってよい。むしろZonabendの民族誌のほうが世界的にも希有であろうが、スリーマイル事故が発生し、国内の原発が安全か危険か世間の関心が集まった79年に2冊のルポルタージュが出版されている。ご存じの方もおいでだろう。堀江邦夫の『原発ジブシー』と森江信の『原子炉被曝日記』（講談社文庫版では『原発被曝日記』）である。原発は年に1回運転を停止し検査を実施する。これを定検という。定検には多くの下請け社員が従事し、被曝のかなりの部分はここで発生する。90年代になってあらたに被曝の再増加が懸念されている（例えば、原子力資料情報室（編）1999a）。今や古典といえるどちらのルポルタージュも、こうしたメンテナンス作業中の下請け社員や作業員の被曝の問題を現場から取り上げた点で、世論だけではなく雇用側にも大きな影響を与えた。

問題設定から民族誌として読むこともできる。特に堀江が実状を知ろうとした当時、原発は安全・必要だという意見と危険・不要だという意見が併存していた。『原発ジプシー』はこの矛盾(ずれ)を、いらだちをとまなう問題意識として、現場での労働体験を通じ迫っていくルポルタージュである。原発のクリーンなイメージの崩壊を下請けも元請け会社もいかに恐怖しているかが見えてくる。そのための見ない行為、隠す行為が横行する。また、放射能への不安を口に出せない職場環境であり、大変危険な作業なのに大変単調な肉体労働であるという記述は『核半島』に描かれた沈黙や退屈さと二重写しになってくる(cf. 樋口1981、1991)。

「原発ジプシー」とは日本国内で各原発の定検を渡り歩く下請け作業員のことだ。この表現が使われるようになった経緯はよくわからない。原発から原発へ移動する暮らしとジプシーのイメージの悲哀感がいまわって名づけられたのだろうか。むしろこの言葉はヨーロッパやアメリカで生活する移動民ジプシーからきている。最近ではジプシーという表現の使用には注意が必要だが、ここでは従来のジプシーでお許し願いたい。「原発ジプシー」が働く場所は原発であり、被曝の危険が満ちているが、奇しくも移動民ジプシーもまた周囲が汚染された世界で生きるという点では共通している。なお、この汚染とは科学者なら実体がないと表現する類の汚染である。象徴的汚染といってもよい。人類学者オークリー Okely は、イングランドのジプシーを調査し、その生活世界を描いてみせた(オークリー1986、Okely1996)。

イングランドのジプシーは汚染された世界に生活しながら同時に自分たちの清浄さを保持する文化的仕掛けを実践してきた。汚染を指すジプシーの語彙はヨゴレ Chikli とケガレ mochadi の2種類である。ヨゴレはただ汚れているときに使われる語だ。問題はない。ケガレは儀礼的(象徴的)に汚染されていることを示す重要な語であり、ジプシー的清浄世界の維持には鍵となる(Okely1996:68)。ジプシーは自分の世界や自分の身体をケガレから守ることをひじょうに重視する。特に身体の外部と内部ははっきりと区別されなければならない。外的身体は内的身体から分離されていなければ内部がケガレてしまうのだ。食物のような身体内部に入れるものは儀礼的に清浄でなければならない。食器も同様である。人影が食物を汚染することすらあるという。したがって洗いのもの(洗浄の習慣)は身体の内に入れる食物や食器と、外部の手洗いや入浴洗濯を厳格に区別しなければならない。洗濯用桶で食料を洗うなんてとんでもないことなのだ。同じく、キャンピングカーのシンクは購入後すぐに蓋をされて使用できなくしてしまう。代わりに目的に合わせた桶 bowls が役目を果たす。このような一見不思議な世界に生きるジプシーの生活はわたしたちに何を教えてくれるのだろうか。

ジプシーが、少なくともイングランドの文献に登場してから500年の間、ジプシーであり続けている理由はこうした汚染/清浄の世界分類ないしは境界の維持と関わっているとオークリーは示唆する。ジプシーは孤立して生存してきたのではなく、ゴールジョ gorgio と呼ぶ非ジプシーとの関係の中で、しかも馬の売買や廃品回収などゴールジョに依存して生計を立ててきた(ibid.:67)。他の遊牧民と異なるところだ。ジプシーにとってゴールジョの世界はケガレに満ちている。ゴールジョはジプシー的な清濁の区別をもたず、外部の身体と内部の身体を区別しないからだ。しかし、ゴールジョの世界は経済的資源、食料資源としてジプシーの生活になくしてはならない。そこでジプシーは様々な仕掛けを駆使してゴールジョとコミュニケーションを取りながら同時にゴールジョのケガレをシャットアウトしているのだ。

Zonabendの民族誌を思い出ししてほしい。『核半島』の労働者は被曝の民俗分類によって目に見えない危険な世界を再創造し、放射線に立ちむかっていた。とするなら、イングランドのジプシ

ーは汚染／清浄の厳格な区分をつくりあげることによってゴールジョへの全面的な依存関係をジブシーの側に主体的に組み替え、コントロールしているのだということができただろう。森江はまた、国内の原発での除染作業において、かなりの被曝をしても仕事を続ける下請け作業員の例を「悲しい意地」と報告している（森江1989、123-5頁）。そこには被曝をしない事務職を軽蔑し見返そうとする現場の作業員の「仕事には文句をつけさせない」誇りがある。職場における主体性への意志が過度の被曝を引き起こしていたのだ。

石田が水爆について述べたように、汚染や被曝は客観的実在としてあるにせよ、人々が自らの環境世界をつくりあげる関係性の中でこそ意味づけられていることをこれらの例は示してはいないだろうか。

環境を組織する

どうやらわたしたちがむかうべき方向がかすかに見えてきたようだ。東海第二原子力発電所では原子炉直近の見学後に質問することができ、有志によって神が祀られていることを知った。それを聞いて神だのみよりもヒューマン・ファクタによるミスをなくす方法について取り組んでほしい旨の発言をした見学者がいたけれども、発電所の神様もやはり発電所で働く人々が自らの生活世界をつくりあげる文化的実践の例となろう。バカらしいと笑ってすませることはできない。

琵琶湖の環境保護運動を見つめてきた嘉田由紀子は、生活者の「小さな物語」から国家や社会の環境保護的言説「大きな物語」をとらえなおす意義を論じている（嘉田1997、cf. Stewart 1996: 97-116）。ラ・アークの労働者やイングランドのジブシーの生活世界も嘉田の議論と重なってくるだろう。つまり、主体的に世界を組織しない限り、すでにそこにある原発とは向き合えないかもしれないということだ。原発はわれわれに近くはならないかもしれない、ということだ。ならばわたしたちにできるのは何か。

危機を自分に近づける、飼いならす

原発には事故・廃棄・労働被曝という大きな問題系があるけれども、事故に限るなら従来の言説では「事故以前」と「事故以後」の視点が混在してきたように思える。このような差異は、障害者の側からの原発をめぐる発言によって特に明確になるであろう（例えば、志子田1989、広河1991）。被曝すると障害をもつ子どもが生まれる可能性があるという理由での反原発運動、これに潜在する問題がつねにすでに障害とともに生活する人々によって指し示されたのであった。クリーンな環境を維持するための、子孫が障害をもたないための反原発運動を健常者中心主義の反原発論といかえることができよう。その主張には障害者や難病者への視線が欠如していたのだ。このような視点を仮に、「事故以前」、つまり、「汚れたくない」視点と表現するなら、他方には「事故以後」、つまり、「汚染を前提に生きる」視点を想定できるだろう。

ところで新聞の報道を見る限り、JCOの事故後の対応のまずさはほぼ関係者全員が認めるところであろう。政府すらも見ることによって見ない、事故は起こらないと自ら信じていたことが次第に明らかになった。国民に安全だと主張することによって原子力を国民から遠ざけていた結果もまた対応の遅れにつながったといえよう。健常者中心主義の反原発論も政府の安全論も方向は正反対にせよ、どちらも「事故以前」「汚れたくない」視点にもとづいているように見える。原子力災害に対する様々な恐怖が沈澱した物語と読めるかもしれない（cf. 明石1997、ドリユモー1997）。

JCOの教訓とは何か？ 事故は起きるのである。JCO事故の2週間前、わたしの所属する消防団の下位分節が20周年記念誌を出版するので「いまそこにある危機？」と題する文を書いた。本稿の題名はこれに由来するものだ。消防団は危機のために存在している。これまで自治と危機の交差するところで活動してきた。「小さな物語」、あるいは小文字の歴史としての共同体の危機を語れる者たちである（Stewart 1996）。わたしがこの数年に関わったのは失火・放火・台風だ。真夜中にサイレンでとび起きハッピーを片手に詰め所まで全力で走ることがたびたびある。きたるべき地震には広域消防（プロの消防署員）がこられなくてもおれたちがここを守ると年長の団員は覚悟を口にしている。

実は原子力安全白書には「消防職団員が」という記述があるのだ⁷⁾。しかし、年に1回のこの地域の総合防災訓練には原子力災害の対応訓練はまったく入っていない。50基以上の原発が国内にあり、台湾、韓国、中国にも原発がある。事故が起こったらどう対応すればいいのか、そんなことを書いた。

上で触れた「事故以後」「汚染を前提に生きる」視点とは事故との関係で自分の世界を組織化できる視点である。誤解をおそれずにいうなら、身近な事故（の可能性）と身近な事故への備えによって遠い原発を自分の物語に組み入れる視点である。わたしの所属する消防団は原発がない内陸地域にある。もっとも近い原発は隣県で100キロ以上離れている。遠い原発、でも知らず知らずに生活に深く組み込まれた原発。原発は毎日ほとんど気づかない電力供給という形ではなく、放射性降下物という危機の形でおそらく物語となる。放射性降下物は遠いどこかの原発からやってくるとしても、われわれの「小さな物語」に直結するからだ。わたしたちにはこの危機への対応という話法の中で原発を身近なものとするチャンスがあろう。わたしたちの世界に原発を主体的に組み込むチャンスが。今望まれるのはそうした危機へ立ちむかう知識の集積と実践ではないか。既に山本定明や瀬尾健らは事故に備えた「汚染を前提に生きる」視点を公刊しているが、さらなる充実が必要であろう（山本1993、瀬尾1995）。

本稿を終えるにあたってエヴァンズ＝プリチャードの言葉を借りよう。ヌアー族の神観念について述べている場所だ。「神は天にあって遠い存在であると同時に人間の諸活動や生活に介入してくる非常に近い存在でもある（エヴァンズ＝プリチャード1982、499頁）。」ここからわたしたちには何が見えるだろうか。

註

- 1) 公開講座は1999年7月3日、10日におこなわれた。
- 2) 1989年4月当時36基という数字が残っている（広瀬（編）1989）。
- 3) 原発の見学会は各電力会社が実施している。わたしが参加した見学会は日本原子力発電株式会社が主催したものだ。詳しくは各社のホームページを参照のこと。
- 4) 「目に見えない」「五感に感じ取れない」恐怖は昔から放射線被曝を特徴づけている。遠丸によれば、対象化されえない何かを与えられたとき意識は無としてとらえ、恐怖として感受する（遠丸1987、94頁）。しかし、同じく目に見えないウィルスの感染や環境ホルモンなどにはほとんど使われない。ということは放射線被曝の恐怖は長年にわたって言説化されていることになる。被曝は身体化されにくいゆえの恐怖として生活者の・政治的・行政的・営業的等々実に多様な広がりをもちながら利用され再生産され続けてきたということなのだろうか。
- 5) 被曝を気にしない労働者を「カミカゼkamikaze」、慎重な労働者を「金利生活者rentier」と呼ぶ（Zonabend1993:104-7）。なおチェルノブイリでも「カミカゼ」という表現が用いられた（七沢1996）。

- 6) 本稿ではジプシーの女性をめぐるケガレの二重性について言及する余裕がない。
- 7) 「原子力災害対策避難誘導等のための手引」に関する註にこの記述がある（原子力安全委員会（編）1999、223頁）。「原子力防災活動において消防職団員がその任務として期待される避難誘導、救急等及び必要とされる原子力防災に係る放射線等の基礎知識に関して述べたもの（同頁）。」しかし、現在でもわたしの所属する分団の各団員は原子力防災についての基礎知識を全然もっていない。

文献（講座配布の原発・環境関連資料を含めた）

- 明石昇二郎 1997『悪性リンパ腫多発地帯の恐怖』技術と人間
- 赤塚夏樹 1992『日本の原発は安全か』大月書店科学全書 44
- 新しい放射線の知識を学ぶ会 1998『生命と放射線 ホルミシスってなあに？』（社）日本電気協会新聞部
- 安齋育郎 1988『がん当たりくじの話』有斐閣
- 飯島伸子 1995『環境社会学のすすめ』丸善ライブラリー 161
- 飯田博美・安齋育郎（編）1984『絵とき 放射線のやさしい知識』オーム社
- 石 弘之 1988『地球環境報告』岩波新書
- 石田英一郎 1967『文化人類学ノート』新泉社
- 市川富士夫・館野淳 1986『放射能は地球をまわる 核燃料サイクルと原発』大月書店
- ウェブ、トニー他 1988『食品を脅かす食品照射』（浜谷・久保田訳）三一書房
- 宇都宮軍縮研究室（編）2000『特集・核兵器と原発 軍縮問題資料』同室
- エヴァンズ=プリチャード、E. E. 1982『ヌアー族の宗教』（向井元子訳）岩波書店
- NHK取材班 1989『いま、原子力を問う 原発・撤退か、推進か』日本放送出版協会
- 榎本聡明 1996『わかりやすい原子力発電の基礎知識（改訂2版）』オーム社
- エリオット、デイブ 1983『原子力の政治学 労働運動と反原発』（田窪雅文訳）現代書館
- オークリー、ジュディス 1986『旅するジプシーの人類学』（木内信敬訳）晶文社
- Okely, Judith 1996 *Own or Other Culture*. Routledge.
- 小野 周（監）1986『原発はなぜこわいかく増補版』高文研
- 核戦争防止国際医師会議＋エネルギー・環境研究所 1993『プルトニウム 核時代の危険物質をいかに扱うべきか』（田窪訳・高木解説）ダイヤモンド社
- 嘉田由紀子 1997「都市化にともなう環境認識の変遷 映像による「小さな物語」」青木他（編）『環境の人類誌』岩波書店 41-75頁
- 加藤尚武 1991『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー 032
- 鎌田 慧 1988『日本の原発地帯』河出文庫
- 1997『六ヶ所村の記録 核燃料サイクル基地の素顔』講談社文庫
- グループテクノ・ルネッサンス 1997『日本の原子力発電ここが論点』日刊工業新聞社
- 原子力安全委員会（編）1999『平成10年度原子力安全白書』大蔵省印刷局
- 原子力資料情報室（編）1990『セラフィールド／ラ・アークに生きる人びと 再処理工場のほんとうの話』同室
- （編）1992『こんなにこわい身近な放射線』同室
- （編）1997『考えてみよう原発のこと』同室
- （編）1999a『原子力市民年鑑99』七つ森書館
- （編）1999b『恐怖の臨界事故』岩波ブックレット
- 小出裕章・足立明 1997『原子力と共存できるか』かもがわ出版
- コルディコット、H. 1979『核文明の恐怖 原発と核兵器』（高木・阿木訳）岩波書店
- 近藤宗平 1998『人は放射線になぜ弱い（第3版）少しの放射線は心配無用』講談社ブルーバックス
- 桜井 淳 1992『原発事故の科学』日本評論社

- 1995『原発のどこが危険か 世界の事故を検証する』朝日選書
- 佐藤ニナ・松浦千秋1996『総被曝者の時代 危ない金属リサイクル』海鳴社
- 志子田悦郎1989『障害者の立場からの原発』広瀬（編）1989、155-6頁
- JICC出版局（編）1988『決定版原発大論争！推進か？廃炉か？ 別冊宝島81』同出版局
- 嶋橋美智子1999『息子はなぜ白血病で死んだのか』技術と人間
- 杉浦正和1991『徹底討論 原発、是か非か ディベートでわかる原発の過去・現在・未来』ほるぷ出版
- 鈴木真奈美1993『プルトニウム不良債権』三一書房
- ステーブンス、マーク1981『スリーマイルパニック』（淵脇耕一訳）社会思想社
- Stewart, K. 1996 *A Space on the Side of the Road*. Princeton U. P..
- 瀬尾 健1995『原発事故 その時、あなたは！』風媒社
- 高木仁三郎1981『プルトニウムの恐怖』岩波新書
- 1994『プルトニウムの未来』岩波新書
- ・水戸巖・反原発記者会1987『われらチェルノブイリの虜囚』三一新書
- 武谷三男1974『原子力 戦いの歴史と哲学』（武谷三男現代論集1）勁草書房
- （編）1976『原子力発電』岩波新書
- 田中三彦1990『原発はなぜ危険か 元設計技師の証言』岩波新書
- 田原総一郎1981『原子力戦争』講談社文庫
- 田丸博文1998『だから原発は危ない！その危険性から身の守り方まで』成星出版
- ダントーニオ、マイケル1995『アトミック・ハーベスト プルトニウム汚染の脅威を追求する』（亀井よし子訳）小学館
- Douglas, M. and Wildavsky, A. 1982 *Risk and Culture*. Univ. of California Press.
- 植田 敦1992a『原発安楽死のすすめ』学陽書房
- 1992b『環境保護運動はどこが間違っているのか？』JICC出版局
- テレビ朝日（編）1988『朝まで生テレビ！原発 是か？否か？』全国朝日放送株式会社
- （編）1989『朝まで生テレビ！原発2 文明の選択』全国朝日放送株式会社
- 土井和己1993『そこが知りたい放射性廃棄物』日刊工業新聞社
- 遠丸立1987『恐怖考』白地社
- 友清裕昭1995『プルトニウム 超ウラン元素の正体』講談社ブルーバックス
- 鳥越皓之1999『環境社会学』放送大学教育振興会
- ドリュモ、ジャン1997『恐怖心の歴史』（永見・西沢訳）新評論
- 中村博一1999『いまそこにある危機？』三部（編）『松本市消防団第二十一分団第三部20周年記念誌』同部、17頁
- 七沢 潔1996『原発事故を問う』岩波新書
- 西尾 漠1999『漠さんの原発なんかいらぬ』七つ森書館
- 日本原子力産業会議1999『原子力ポケットブック 1998/99年版』同会議
- 野口邦和1998『放射能事件ファイル』新日本出版社
- 野口哲典1999『地球に今、何が起きているか』KKベストセラーズ
- 樋口健二1981『闇に消される原発被曝者』三一書房
- 1991『アジアの原発と被曝労働者』八月書館
- 1996『原発1973年-1995年 樋口健二写真集』三一書房
- 平野治和1999『原発銀座で輝け診療所』かもがわ出版
- 広河隆一1991『チェルノブイリ報告』岩波新書
- 1995『チェルノブイリから広島へ』岩波ジュニア新書
- 広瀬 隆1986『東京に原発を』集英社文庫

- 1991『新版眠れない話 刻々と迫りくる日本の大事故』新潮文庫
- 1994『新版最後の話 死の灰と世紀末』新潮文庫
- (編) 1989『原発がとまった日 1億2000万人のための脱原発読本』ダイヤモンド社
- 福岡知之 1989『原子力は悪魔の手先か 原子力の是非を問う』テレメディア
- 藤田祐幸 1996a『脱原発のエネルギー計画』高文研
- 1996b『知られざる原発被曝労働 ある青年の死を追って』岩波ブックレット
- ブラムウェル、アンナ 1992『エコロジー 起源とその展開』(金子・森脇・大槻訳) 河出書房新社
- 堀江邦夫 1984(1979)『原発ジプシー』講談社文庫
- マクソーリ、ジーン 1991『シャドウの恐怖 核燃料再処理工場で汚染された人々の運命』(浜谷喜美子訳) ジャプラン出版
- 向坊 隆 (監) 1989『考えてみませんかエネルギーと原子力』テレメディア
- 松岡 理 1992『改訂版 プルトニウム物語 その実像と虚像』ミオシン出版
- 1995『放射性物質の人体摂取障害の記録 過ちの歴史に何を学ぶか』日刊工業新聞社
- 水口憲哉 1989『海と魚と原子力発電所 漁民の海・科学者の海』農文協人間選書
- 森内和之 1996『放射線ものがたり』(応用物理学会監修) 裳書房ポピュラーサイエンス
- 森江 信 1989(1979)『原発被曝日記』(『原子炉被曝日記』) 講談社文庫
- 森永晴彦 1984『放射能を考える 危険とその克服』講談社ブルーバックス
- 1997『原子炉を眠らせ、太陽を呼び覚ませ』草思社
- 山本定明 1993『原発防災を考える 自治体の責務と、ひとりができること』桂書房
- 吉岡 斉 1999『原子力の社会史 その日本的展開』朝日選書
- 緑風出版編集部 (編) 1998『核燃料サイクルの黄昏』緑風出版
- Rosald, R. 1989 *Culture and Truth*. Beacon Press.
- ロビンソン、マリリン 1992『ピーター・ラビットの自然はもう戻らない イギリス国家と再処理工場』(鮎川ゆりか訳) 新宿書房
- 渡辺鋭氣 (編) 1982『労働者の砂漠 80年代大工場の現場から』拓殖書房
- 渡辺一夫・稲葉次郎 (編) 1999『放射能と人体 暮らしの中の放射線』研成社
- Zonabend, F. 1993 *The Nuclear Peninsular*. C. U. P..